

背奈氏の氏称とその一族

一

古代における背奈氏は、高句麗系の渡来氏族であつて、背奈公行文、背奈王福信（後に高麗朝臣・高倉朝臣に改姓）らの名前がよく知られている。一般に背奈氏の「背奈」は、「せな」と読まれている。

この通説となつてゐる背奈氏の読み方に疑いをかけられたのは関晃氏である。かつて関氏は、その著『帰化人——古代の政治・経済・文化を語る——』に索引を付せられた新版（昭和四十一年十一月刊）において、「背奈」は「せな」

佐伯 有 清

と読むべきでなく、「はいな」と読まなければならないという見地に立つて、その索引「は」部の背奈行文の項に「はいなのぎようぶん」、背奈福徳のそれには、「はいなのふくとく」と読みをつけられたのであつた。

もっとも「背奈」を「せな」と読むと同時に、「はいな」と読んだ先学に太田亮（二八四・一九五六）があり、その著『姓氏家系辞書』（大正九年十月刊）、および『姓氏家系大辞典』（昭和十七年十二月、第一巻刊）の「ハ」部に「背奈」の項を設けて、「セナ条を見よ」とし、また後著の「セ」部の「背奈」の項には「セナ」とならんで「ハイナ」の読みをつけられ、「背奈」を「はいな」とも読むべきことを

指示されていたのである。

ところで最近、関晃氏は、「背奈氏の氏称」（『吉川弘文館の新刊』三七、平成三年四月）と題する論文を発表され、「背奈」は、「せな」と読むべきでなく、「はいな」と読むのが正しいと論断され、そのように読む理由を明快に説かれている。関氏の論拠は、百済や高句麗からの亡命貴族の例から推して、「背奈」という氏称は、本国にいた時からのものとみてよいであろうから、その「背」の字を倭訓で「せ」と読んだとは、とうてい考えられないということ、また人名・地名などの表記は、ごくまれな例外を除いて、平安初期ころまでは、原則として音訓混用は、ほとんどなく、「背奈」を「せな」と読むのは、音訓混用となるので、高句麗にいた時に、違う漢字を用いていたものを日本に渡来してから日本人が、これに「背奈」の二字をあてたのであると考えるのも、ほとんどありえないことであるという二点である。

関氏が指摘されるとおり、確かに「背奈」を「せな」と読むのは、いわゆる湯桶読みであって、古代においては、「はいな」と読まれていたと考えるのが妥当である。しかしながら背奈公行文の歌一首を載せる『万葉集』巻第十六

には、「消奈行文」とあって、この「消奈」を、古くから「せな」と読まれてきていることは無視できない。ここにあらためて背奈氏の氏称について考察を加えてみる必要を感じるのである。

二

関晃氏が指摘された二つの論拠のうち第二点にかかわる指摘が、近時、青木和夫氏他校注の『続日本紀』二（新日本古典文学大系13、平成二年九月刊）の校異補注においてなされていることに、まずふれておく必要がある。

『続日本紀』天平十年三月辛未条に、

従六位上背奈公福信授外従五位下。

とみえるが、右にふれた青木氏他校注の『続日本紀』には、「背奈公福信」の「背」の字について、その校異補注として、
底「肖」、兼等・印「背」に作る。狩「肖考」、「伴」
「肖」と傍書。三五四頁3参照。（六四一頁上段）
とある。「底」とは右の校注本が底本とした名古屋市博物館蓬左文庫所蔵本のことであり、この写本には、「背」の字が、「肖」となっていることを示しているのである。ま

た「兼」とは、天理大学附属天理図書館所蔵の吉田兼右本であり、「印」というのは、明暦三年の版本のことであって、吉田兼右本などの写本、および明暦三年の版本では、「背」に作っていることをあらわしている。さらに「狩」とは、無窮会神習文庫所蔵の狩谷棧齋校本であって、「伴」すなわち宮内庁書陵部所蔵の伴信友校本とならんで前者に「肖像」、後者に「肖イ」の傍書があることを説明しているのである。そして「三五四頁3参照」とあるのは、『統日本紀』天平十一年七月乙未条に、

授外従五位下背奈公福信従五位下。正六位上新城連吉足外従五位下。

とある記事の「背奈公福信」の「背」の字の頭注に、「3背（兼等・東傍・高傍・大改）↓校補」とあるのを参照せよという意味である。この頭注に示されている「東傍」というのは、京都御所東山御文庫所蔵の写本の傍書、「高傍」とは、国立歴史民俗博物館所蔵の高松宮本の傍書、および「大改」とは、新訂増補国史大系本において改められている文字を指している。すなわち、この頭注は「背奈公福信」の「背」の字は、吉田兼右本などでは、「背」の字に作り、東山御文庫所蔵の写本、および高松宮本では「背」と傍書

されており、また新訂増補国史大系本では「背」の字に改めてあると説いているのである。さらに「↓校補」とあるので、その校異補注を見てみると、そこでは次のように説かれている。

諸本ともに「肖」と書す（東傍は背、高傍は背。印も「肖」。大ここでは「肖」を別字と見て「背」に改める。諸本、本巻の「背奈」以外の「背」はみな「背」と書し、「肖」と「背」を使い別ける。「肖」は「背」の略体と字形が似る。諸本の「肖」を「背」の異体字ではなく「肖」（セウ）と読取ることも検討しなければならぬ。「肖」が「背」に転訛したとすると、福信の姓は肖奈公・肖奴王（肖奴はセウヌ）となり、これは高句麗の五部の「消奴部」から生まれた姓であることになる。「背奈」は通常湯桶読みで「せナ」と読まれているが不自然な読み方であると言える。（六四一頁下段）

この論述には、きわめて重要な指摘がみられる。その論点に解説をほどこしながら箇条書きにすれば、次のとおりである。

(一) 底本とした名古屋博物館蓬左文庫所蔵本をはじめ

諸写本には、『続日本紀』天平十一年七月乙未条に記されている「背奈公福信」の「背」の字を、すべて「肖」と書いてある。

(二) 「大」すなわち新訂増補国史大系本は、「肖」の字を「背」に改めている。すなわち同本の頭注には、「背、原作肖、抛上文天平十年三月紀改」とあって、本文を「背」に訂してある。

(三) 諸本では、天平十一年七月乙未条を載せている巻第十三に記されている「背奈」以外の「背」の字は、すべて「背」と記しており、「肖」と「背」の字を、使い別けている。すなわち本巻の天平十二年十一月甲辰条の「山背王」、同年十二月戊午条の「山背国」、および同年十二月丙寅条の「山背国」などの「背」の字を「肖」と書いてはいない。

(四) 「肖」の字は、「背」の略体の字形と似ている。たとえば、「肖」(「肖」)、「肖」(「肖」)のごとくである。

(五) 諸本に記されている「肖」の字が、「背」の異体字でなく、もともと「肖」(セウ)の字であると読み取れることも検討する必要がある。

(六) 「肖」が「背」の字に転訛したならば、福信の姓は、

肖奈公・肖奴王であって、「肖奴」は「セウヌ」となり、高句麗の五部の「消奴部」から生じた姓であることになる。

(七) 「背奈」は、一般的に湯桶読みで「セナ」と読まれているが、この読み方は不自然である。

まず(一)については、村尾元融の『続日本紀考証』が、天平十一年七月条の考証部分で、すでに「肖奈公」に、「肖当依堀本一作背下皆倣此」と注記している。村尾元融が記す「堀本」というのは、元融が『続日本紀考証例言』で、

堀本。出於平安堀氏。每卷首印平安堀氏時習齋藏八字。卷末載寛永十四年等字及識語。其下捺重圈印。印文曰杏菴堀氏。名正意。時習齋。其曾孫正修別号也。と述べているように、堀杏庵(一五八五—一六四二)が所蔵していた写本である。この堀杏庵旧蔵本は現存していないようであるが、村尾元融の記述によれば、卷末に「寛永十四年等字及識語」を載せていたので、おそらく十七世紀の初期に書写された本であって、その写本は、「肖奈」の字を「背奈」に作っていたのである。

また佐伯有義校訂標注の『続日本紀』(朝日本)天平十一

年七月乙未条の「背奈公福信」の頭注には、「背奈公、原本背を肖に作る十年三月紀に拠て改む下同じ」とある。この注記は、(二)に記した新訂増補国史大系本と同様であるが、朝日本が底本とした「原本」とは、明暦三年（一六五七）に、立野春節（一六二五？）が校訂した版本である。この版本は、三条西本系統の写本を底本とし、それを蓬左文庫本系統の写本で対校したものとみられており、また版本が底本とした三条西本系統の写本は、立野春節の師である中原職忠（一五八〇—一六六〇）が所持していた近世初期の書写にかかる宮内庁書陵部所蔵の中原本の可能性があるといわれている（吉岡真之・石上英一「書誌」、新日本古典文学大系12『続日本紀』一所収参照）。

このようにみてみると古写本に系統を引く写本は、近世初期に書写された写本にいたるまで、堀杏庵旧蔵本は別として、その多くは天平十一年七月乙未条の「背奈公福信」を「肖奈公福信」と書いてあったことになり、村尾元融が「下皆倣此」と注記し、また佐伯有義が「下同じ」と標注しているのによれば、天平十一年七月乙未条以下、同十五年五月癸卯条・同年六月丁酉条などにみえる「背奈^{ミナ}王福信」は、すべて「肖奈」の姓に作っていたのである。

ところで、「背奈公福信」よりも年代的に早く『続日本紀』に記されている背奈公氏の一族の人物である背奈公行文については、養老五年正月甲戌条に、「第二博士正七位上背奈公行文」とみえ、また神龜四年十二月丁亥条に、「授正六位上背奈公行文從五位下」と記されていて、最近の青木和夫氏他の校注本にいたるまで、行文の姓である「背奈公」については、「背」を原本が「肖」に作っているという注記がない。とすれば背奈公行文の人名は、古写本以来、ひとしく「背奈」となっていて、「肖奈」とは書かれていなかったのである。

そこで考えられるのは、(六)で指摘されているように、もともと「肖」であつたものが、やがて「背」の字に転化したのではないかということである。また一方、(四)で注意を喚起しているとおり「肖」の字は、「背」の略体の字形と似ているので、背奈公行文のように、「背奈」とあつたものが、略体の字形が酷似しているので、背奈公福信の場合には、それを誤って「肖奈」と書いてしまったということもできる。また「肖奈公福信」とあるように、もともと「肖奈」が正しいのに、背奈公行文のところは、「肖」の字を誤写して「背奈」と書き伝えられたともいえるのである。

このように、「背奈」「肖奈」をめぐって、さまざまな考
えがめぐらせるのであるが、さらに背奈公行文について、
『続日本紀』以外の文献にみえる記載が、どのようになって
いるかを顧みておく必要がある。

成立の古い順からみてゆくと、まず天平勝宝三年（七五
二）十一月に成立した『懷風藻』に背奈王行文の詩二首が
採録されているが、その目録には、「從五位下大學助背奈
王行文二首（宴新羅客。上巳宴）」とある。現在通行する
『懷風藻』の活字本のいずれもが行文の氏姓を「背奈王」
に作っている。ところが実は、室町末期の書写と考えられ
ている現存最古の『懷風藻』写本である蓬左文庫所蔵の尾
州家本をはじめ、慶長年間書写の内閣文庫所蔵の来歴志本、
江戸初期書写の内閣文庫所蔵の林家本、および静嘉堂文庫
所蔵の脇坂本などの諸写本、さらに版本としては最初の天
和四年刊本は、いずれも「背奈王行文」を「肖奈王行文」
に作っているのである（大野保『懷風藻の研究——本文批判と
註釈研究——』参照）。また『懷風藻』本文の「從五位下大

學助背奈王行文二首（年六十二）」の「背奈」についても、来
歴志本・脇坂本は、ともに「肖奈」に作り、尾州家本は「肖」
となっていて、背奈王行文は、『懷風藻』においても、も
とは肖奈王行文と表記されていたことが考えられる。

次に天平宝字四年（七六〇）正月以後、同年八月以前の
間に成立した『家伝』下の「武智麻呂伝」に、背奈公行文
は、「宿儒」の一人として「肖奈行文」とみえる。これは「建
久七年丙辰卯月八日書写之法相宗末葉兼圓舜禎之本也」
云々と奥書されている『群書類従』第五輯所収本によった
ものであるが、同本には「肖」の字の右に「背歟」の傍注
がほどこされている。宮内庁書陵部所蔵の伏見宮本は、文
和二年（一二三三）の奥書のある古写本の臨写本であるが（宮
内庁書陵部編『圖書寮典籍解題——歴史篇参照』、上巻のみで「武
智麻呂伝」を欠いているので、竹内理三氏編『寧楽遺文』
下巻所収の『家伝』は、上巻を伏見宮本によって校訂して
あるけれども、下巻は『群書類従』所収本にもとづいてい
る。したがって、もちろん「肖奈行文」に作ってある。背
奈公行文を「肖奈行文」と書いている『群書類従』所収本
は、建久七年（一一九六）の奥書のある写本を忠実に伝え
ていると考えてよいから、「肖奈行文」とあるのは、原本

の表記そのままを伝えたものとみなすことができる。

以上のように『懷風藻』の古写本、および『家伝』下の「武智麻呂伝」の表記にあたってみると背奈公行文の「背」の字は、いずれも「肖」となっており、「肖奈公行文」とするのが、正しいように思われてくる。

事実、『万葉集』巻第十六に載っている「謗倭人一首一首」(二六・三八三六)の左注に、「右歌一首。博士消奈行文大夫作之」とあって、背奈公行文を「消奈行文」としているのが注目されるのである。「消奈」は、あきらかに「肖奈」に通じる。『万葉集』は、奈良末・平安初期に成立したものとされているが、巻第一から巻第十六までは、天平十六、十七年(七四四・七四五)ころに撰ばれたものといわれているから、そのころの表記が、そのまま伝えられているとすれば、背奈の氏名は、「肖奈」(せうな)が本来の名称であって、「消奈」(せうな)とも通じ用いられていたことになる。

ここにいたって青木和夫氏他校注の(五)における問題の提起、すなわち「背奈」の「背」の字は、「肖」と読み取る検討の必要性にたいする解答が、いちおう提出できたと思われる。そこでさらに(六)で提起されている高句麗の五部の

「消奴部」と氏姓である「肖奈」「消奈」との関連の問題について考えてみる必要が生じてくるが、これについては、最後にとりあげることにして、なお背奈氏の一族の人々のことを取りあげて、「肖奈」という表記の問題を掘りさげることしたい。

四

第二節においてふれたごとく『続日本紀』天平十年三月辛未条、および同十一年七月乙未条にみえる背奈公福信は、同十五年五月癸卯条・同年六月丁酉条などに「背奈王福信」としてみえ、これらの条にあっても「背奈」の氏名は、先学の指摘によれば、いずれも「肖奈」の姓に作っていたのである。

これについて青木和夫氏他校注本によって見てみると天平十五年五月癸卯条にみえる「背奈王福信」の頭注に「20背↓校補」とあり、その校異補注には、

底・兼・谷・東「肖」、高「背」(行書体)に作る。「肖」である可能性については三三八頁9・三五四頁3参照。(六四八頁)

と記され、また同十五年六月丁酉条にみえる「背奈王福信」の頭注に「8背↓校補」とあり、その校異補注には、

底・兼・東「肖」、谷・高「背」（行書体）に作る。「肖」である可能性については三三八頁9・三五四頁3参照。（六四八頁）

とある。

これらの校異補注に「底」とあるのは、本校注本が底本とした名古屋市博物館蓬左文庫所蔵本、「兼」は天理大学附属天理図書館所蔵吉田兼右本、「谷」は宮内庁書陵部所蔵谷森本、「東」は京都御所東山御文庫所蔵本、「高」は国立歴史民俗博物館所蔵高松宮本であるが、天平十五年五月癸卯、および同年六月丁酉の両条にみえる「背奈王福信」の「背」の字についても、多くの写本が「肖」の字に作っているのである。しかも前条について宮内庁書陵部所蔵の谷森本は、蓬左文庫所蔵本などの写本のように「肖」となっているのに、後条では東山御文庫所蔵本と同様に行書体で「背」と書かれている。このような「肖」と「背」の字の混用は、天理図書館所蔵の吉田兼右本においてもみられる。当本は右の両条では「肖」に作っているのに、さきにふれた天平十年三月辛未、および同十一年七月乙未の両条

では、「背」と記されている。

この場合から知られるように同一写本でも「背」「肖」と両方の字で記されている箇所があるのは、その祖本の書写段階で、四十巻からなる大部の『続日本紀』の筆写事業が、数名の書き手によってなされたことによって生じたのであろう。しかも青木和夫氏他校注本が底本とした蓬左文庫所蔵本が、『続日本紀』卷第十三の冒頭に収める天平十年三月辛未条以下、背奈公福信の「背奈」を一貫して「肖奈」と書いているのに、卷第八に収める養老五年正月甲戌条、および卷第十に記されている神龜四年十二月丁亥条にみえる背奈公行文の「背」が「肖」とは作っていないのは、蓬左文庫所蔵本の性格からして理解できるのである。

というのは、蓬左文庫所蔵本は、江戸時代初期の写本である卷第一から卷第十までと、鎌倉時代後期（十三世紀後半）の写本である卷第十一から卷第四十までの取り合せ本であるからである（吉岡真之・石上英一「書誌」、前掲参照）。卷第一から卷第十までの二十冊は、吉田兼右（一五一六・一五七三）の子である僧梵舜（一五五三・一六三三）が吉田兼右本を二部書写した転写本のうち一本（内閣文庫本）を補写したものであって、それを卷第十一から卷第四十までの古写本に

取り合せたのが蓬左文庫所蔵本なのである(吉岡真之・石上英一、前掲論文参照)。したがって蓬左文庫所蔵本の巻第一から巻第十までは、吉田兼右本の孫本となり、同本は、永

正十二年(一五一五)に卜部家相伝の『続日本紀』を書写した三条西本を転写したものである。これにたいして巻第十一から巻第四十までは、十三世紀の後半に書写され、もと金沢文庫に所蔵されていた貴重な古写本であって、現存する『続日本紀』の写本としては最古のものである。

したがって巻第八、および巻第十にみえる背奈公行文の「背」の字とは異なつて巻第十三や巻第十五にみえる背奈公(王)福信の「背」の字が「肖」となっているのは当然なのである。しかも『続日本紀』最古の写本に「肖奈」と書かれていることは、背奈氏の氏名が実は「肖奈」であつた可能性を強めるといわなければならない。すでにみてきたように背奈公行文の「背」が「懷風藻」の古写本や『家伝』下の「武智麻呂伝」でも「肖」になっており、また『万葉集』では「消」と記されていることをあわせ考えてみると、「肖(消)奈」が正しく、「背奈」は誤写にもとづくものであつて、「背奈」という姓は当時存在しなかつた氏名であるとみなしてよいであらう。

しかしながら各種の写本が「肖」と書かれているといつても、それらは、いずれも後世に書写されたものであるから、伝写の間に「背」の字を「肖」と誤写されたのではないかという可能性は、まだ存在する余地を残している。

そこで背奈氏の一族の氏人が現に「背奈」を称していた時代の生の史料にあたることであれば、その氏族の名称が「背奈」か、あるいは「肖奈」か、そのいずれが正しいかを確実なものとすることができるであらう。

背奈氏の一族の人名で『続日本紀』に最初にあらわれるのは、すでにみてきたように、養老五年正月甲戌条に記されている背奈公行文である。行文は養老五年(七二二)正月、明経第二博士・正七位上の時に、「優遊學業。堪_レ為_二師範_一者」の一人として賞賜され、絶十五疋・糸十五綯・布三十端・鉄二十口をあたえられ、ついで神龜四年(七二七)十二月、正六位上の行文は、従五位下の位階に叙せられたのである。こうした経歴のほか、行文は「懷風藻」に詩二首、『万葉集』に歌一首を残し、また『家伝』下の「武智麻呂伝」に宿儒の一人としてみえることは、さきにみたとおりである。

次に『続日本紀』に記されている背奈氏の一族は、背奈

公福信である。福信についても天平十年三月辛未条以下にみえることは、さきにふれたとおりである。福信は、天平十年（七三八）三月、従六位上から外従五位下に昇り、翌十一年七月、従五位下となり、同十五年五月、正五位下に叙せられ、同年六月、春宮亮に任ぜられている。そして天平十九年六月辛亥条に、

正五位下背奈福信。外正七位下背奈大山。従八位上背奈広山等八人。賜背奈王姓。

と記されているように、福信ら八人は、天平十九年（七四七）六月に、背奈王の姓を賜わったのである。さらに福信らは、天平勝宝二年（七五〇）正月に、高麗朝臣の姓を賜わっている（『続日本紀』天平勝宝二年正月丙辰条参照）。

背奈公福信が背奈王の姓を賜わった時に、一族の氏人として同時に背奈王姓となった大山と広山は、『続日本紀』における初見の人物である。そのうち大山は、『続日本紀』天平勝宝六年四月壬申条に入唐判官として「巨萬朝臣大山」が正六位上から従五位下に叙せられたことがみえ、これよりさき天平勝宝二年八月二十八日付の「造東大寺司解」には、造東大寺司判官として「巨萬朝臣『大山』（『大日本古文書』二五―一三四）の自署がみえる。大山が「巨萬朝臣」

の氏姓を称していることから、大山も福信が天平勝宝二年正月に高麗朝臣を賜姓された時に、同時に高麗（巨萬）朝臣の氏姓に改めたものと考えてよい。

一方、広山の『続日本紀』における動静は、右に掲げた天平十九年六月辛亥条の賜姓記事につづくものとして天平宝字六年四月戊午条、および同八年正月乙巳条の記事があげられる。前条は、広山が遣唐副使に任命された記事であって、時に広山は正六位上であった。また後条は、広山が正六位上から外従五位下に昇叙されたことを伝えている。両記事には、広山の氏姓は、もちろん高麗朝臣に作っており、広山も天平勝宝二年正月、背奈公福信らが高麗朝臣と改姓したさいに、同時に高麗朝臣となったとみなすことができる。

ところが幸いなことに、広山は正倉院文書の天平二十一年（七四九、この年四月十四日、天平感宝元年と改元）正月から同年である天平感宝元年五月までのことを記す『千部法華経料納物帳』以下、しばしば、正倉院文書に、その名前が記載され、広山が活躍していた時代に、広山の姓が、どのように記されていたかを、つぶさに知ることができる。

『大日本古文書』に記載されている広山の記事を表にして示せば、次頁のとおりである。

番号	年月日	記事	『大日本古文書』の傍注	『大日本古文書』の巻数・頁数
①	天平二十一年正月二十七日	檢 肖奈広山	(背力)	一〇三二
②	〃	檢納 肖奈広山		三二〇九
③	二月二十四日	肖奈広山		三二〇〇
④	〃	肖奈広山		三二〇〇
⑤	二月二十六日	肖奈広山		三二〇〇
⑥	〃	肖奈広山		三二〇〇
⑦	三月二十七日	肖奈	(背力)	一〇四五
⑧	〃	肖奈	(背力)	一〇四五
⑨	三月二十五日	肖奈	(背力)	一〇四五
⑩	〃	肖奈	(背力)	一〇四五
⑪	〃	肖奈	(背力)	一〇四五
⑫	〃	肖奈	(背力)	一〇四五
⑬	天平感宝元年四月二十五日	肖奈	(背力)	一〇四五
⑭	〃	肖奈	(背力)	一〇四五
⑮	〃	肖奈	(背力)	一〇四五
⑯	〃	肖奈	(背力)	一〇四五
⑰	五月一日	肖奈	(背)	一〇四五
⑱	〃	肖奈	(背)	一〇四五
⑲	〃	肖奈	(背)	一〇四五
⑳	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉑	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉒	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉓	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉔	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉕	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉖	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉗	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉘	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉙	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉚	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉛	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉜	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉝	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉞	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㉟	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊱	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊲	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊳	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊴	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊵	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊶	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊷	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊸	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊹	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊺	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊻	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊼	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊽	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊾	〃	肖奈	(背)	一〇四五
㊿	〃	肖奈	(背)	一〇四五
1	天平二十一年正月	坊舍人従八位上肖奈王広山	(背)	一〇三三
2	閏五月二日	肖奈広山		二二四四
3	〃	肖奈広山		二二四四
4	〃	肖奈広山		二二四四
5	〃	肖奈広山		二二四四
6	〃	肖奈広山		二二四四
7	〃	肖奈広山		二二四四
8	〃	肖奈広山		二二四四
9	〃	肖奈広山		二二四四
10	〃	肖奈広山		二二四四
11	〃	肖奈広山		二二四四
12	〃	肖奈広山		二二四四
13	〃	肖奈広山		二二四四
14	〃	肖奈広山		二二四四
15	〃	肖奈広山		二二四四
16	〃	肖奈広山		二二四四
17	〃	肖奈広山		二二四四
18	〃	肖奈広山		二二四四
19	〃	肖奈広山		二二四四
20	〃	肖奈広山		二二四四
21	〃	肖奈広山		二二四四
22	〃	肖奈広山		二二四四
23	〃	肖奈広山		二二四四
24	〃	肖奈広山		二二四四
25	〃	肖奈広山		二二四四
26	〃	肖奈広山		二二四四
27	〃	肖奈広山		二二四四
28	〃	肖奈広山		二二四四
29	〃	肖奈広山		二二四四
30	〃	肖奈広山		二二四四
31	〃	肖奈広山		二二四四
32	天平二十一年正月	坊舍人従八位上肖奈王広山	(背)	一〇三三

五

十一 三六

12

文書には、明らかに「肖」と記されている。

本年三月五日自刻請紙二万八千張 見狀七百八十八張 五月五日
二月八日自刻請紙二万八千張 見狀七百八十八張 五月五日
本年三月五日自刻請紙二万八千張 見狀七百八十八張 五月五日
本年三月五日自刻請紙二万八千張 見狀七百八十八張 五月五日

千新新
千新新
千新新

そこで『大日本古文書』が、ただ二箇所「背奈広山」に作っている②②（二四・一八二）と②⑧（二四・一七七）の原文書、すなわち「天平感宝元年五月廿一日宣」云々とある文書（続々修十五帙三）、および「天平感宝元年五月廿七日奉請内裏」とある文書（続々修十五帙三）にあたってみると、それら文書にも「背」の字が、「肖」となっていることが知られるのである。

前者の原文書写真を掲げてみると、

云々修十五帙三

右修長官宮内省卿平上皇女皇太子皇孫御所西

御所西

となっており、署名の箇所は、明らかに「知肖奈広山」（広

山）は自署」と判読できる。また後者の原文書は、

解源奈廣立卷 第一七四

右修長官宮内省卿平上皇女皇太子皇孫御所西

長官宮内

知肖奈廣山

となっていて、その署名の部分は、明確に「知肖奈広山」（広山）は自署」と書かれている。

このように『大日本古文書』が「背奈広山」と記している二つの箇所も、原文書の写真で確かめてみると、そのいずれもが「肖奈広山」になっいて、例外ではなかったことがわかる。

なお青木和夫氏他校注本の校異補注の四で指摘されている点、すなわち「肖」の字は、「背」の略体の字形と似ているということに関して、正倉院文書において「背」の字が、どのように書かれているかを、山背野中という人物の記載を例にとつて原文書の写真を調べてみると、

山背野中 二月廿日言

（天平二十年二月二十

二日『写経料紙筆墨納充帳』〔正集十八裏書〕『大日本古

文書 三一四五

山背野中 三十一

(天平二十年二月二十)

四日『写一切経所解』〈正集十八裏書〉『大日本古文書』三五一

山背野中 三十一

(天平二十年七月一日)

類從『千部法華經写上帳』〈正集十一裏〉『大日本古文書』二四五〇八

山背野中

(天平二十年八月二日)『千部法華經

紙筆墨充帳』〈正集十二裏〉『大日本古文書』二四五〇五
となっており、「山背」の「背」の字が「肖」とまぎらわしく書かれている字は、まったくない。

以上のように正倉院文書の原文書写真によって背奈広山の名前の記載を調べてみると、すべて「肖奈広山」となっており、また山背野中という人物の「背」の字を見ても、「肖」の字のようにみとめられるものは、ひとつとしないことから、「背奈」の氏名は、実は「肖奈」であっ

たとしなければならなくなる。ここに至って関見氏が「背奈」の氏称を「はいな」と読むべきであるとする高説は、妥当とはいえなくなり、「背奈」は、「肖奈」の誤記されたものが、正しい字のごとくに思われてきたのであって、今後は、「せうな(しような)」と読まなければならぬ。背奈公行文が、『万葉集』で「消奈行文」と表記されているのも、けだし当然のことであつたといえるのである。

五

背奈王福信は、天平勝宝二年(七五〇)正月、高麗朝臣の氏姓を賜わり、宝龜十年(七七九)三月には高倉朝臣と改姓している(『続日本紀』天平勝宝二年正月丙辰条、および宝龜十年三月戊午条参照)。高倉朝臣となつた福信は、延暦八年(七八九)十月、散位従三位で薨じたが、『続日本紀』に載せる薨伝には、「其祖福徳属唐将李勣拔平壤城。来帰国家。居武蔵焉。福信即福徳之孫也」(『続日本紀』延暦八年十月乙酉条)とあって、福信は、その祖父福徳の時代に高句麗から日本に渡来したのであつた。『新撰姓氏録』には、高倉朝臣氏の本系は載せられていないが、その旧姓高麗朝

臣氏の本系が左京諸蕃下の部に収められており、そこには、「出自高句麗王好台七世孫延典王也」とある。

高句麗の出身で、「肖奈」という姓といえ、青木和夫氏他校注本の校異補注の(六)に指摘がみられるように、高句麗の五部制の一つである「消奴部」のことが思いあたり、「肖奈」は、それから生じた姓であるということも考えられるのである。

高句麗の五部制の一つである「消奴部」については『魏志』高句麗伝に、

(一) 本有五族。有消奴部。絶奴部。順奴部。灌奴部。

桂婁部。本消奴部為王。稍微弱。今桂婁部代之。

とあり、また同伝に、

(二) 王之宗族。其大加皆称古雛加。消奴部本国主。今

雖不為王。適統大人得称古雛加。亦得立宗

廟。祠靈星社稷。

とみえ、さらに、

(三) 拔奇怨為兄而不得立。与消奴加各将下戸三

万余口詣康降。還住沸流水。

とみえる。この三つの記事は、「消奴部」を「消奴部」「消奴加」に作っている。『魏志』高句麗伝の(一)に相当する記

事を『後漢書』高句麗伝は、

凡有五族。有消奴部。絶奴部。順奴部。灌奴部。桂婁部。按今高麗五部。一曰内部。一名黄部。即桂婁部也。二曰北部。一名後部。即絶奴部也。三曰东部。一名左部。即順奴部也。四曰南部。一名前部。即灌奴部也。五曰西部。一名右部。即消奴部也。本消奴部为王。稍微弱。後桂婁部代之。

と記し、『魏志』高句麗伝にみえる「消奴部」を「消奴部」としている。『梁書』高句麗伝に、「本有五族。有消奴部。絶奴部。慎奴部。灌奴部。桂婁部。本消奴部为王。微弱。桂婁部代之」とみえ、『後漢書』高句麗伝の記事に考注をほどこした唐の章懷太子(李賢、六五—六八四)の注「按今高麗五部」云々という記述に相当するものが、『新唐書』高麗伝には、

分五部。曰内部。即漢桂婁部也。亦号黄部。曰北部。即絶奴部也。或号後部。曰东部。即順奴部也。或号左部。曰南部。即灌奴部也。亦号前部。曰西部。即消奴部也。

とあって、『梁書』『新唐書』は、ともに「消奴部」と書いている。

かつて今西龍（一八七五—一九三三）は、『魏志』の「涓奴部」、『後漢書』などの「消奴部」について、「涓と消と孰れか正しきやは容易に判定し難し」と述べ、また「涓那と消那と孰れが正しきか不明なり」（『高句麗五族五部考』『朝鮮古史の研究』所収参照）と説いた。しかしながら張楚金撰、雍公穀注の『翰苑』高麗条の本文「部貴五宗」に注記されている『魏略』逸文に、

其国大有^{（本）}五族。有^{（主）}消奴部。〔絶奴部〕。順^{（通）}〔奴部〕。准^{（主）}奴部。樓桂樓部。〔本消奴部〕為^{（主）}土。〔稍微弱。〕〔今桂樓部代^{（主）}之。〕

とあって、晋の陳寿（二三三—二九七）が撰述した『魏志』の典拠となった魚豢（？—二八〇—二八九）の『魏略』には、「消奴部」と書かれていたようであり、かつ『後漢書』などの諸書には、多く「消奴部」とあるので、『魏志』の「涓奴部」は、後世の誤写によるものであろう。

ただし右の『翰苑』残簡は、「天下の孤本」（竹内理三校訂・解説『翰苑』（昭和五十二年五月刊）、「海内の孤本」（湯浅幸孫校釈『翰苑校釈』昭和五十八年二月刊）といわれている平安初期の写本（太宰府天満宮所蔵）であるので、「涓奴部」よりも「消奴部」のほうが正しいと断定はできない。なぜ

ならば、右に掲げた『翰苑』所引の『魏略』逸文をみて知られるように誤字・脱字がきわめて多く（引用文の字の右側の（ ）内の字は『魏志』によって訂し、また（ ）内の語句は、『魏志』によって補った、後世の誤写、もしくは『後漢書』などの影響を受けて、「涓奴部」を「消奴部」と書いた可能性も考えられるからである。さらに版本としては、もっとも古い宋の慶元版『太平御覧』所引の『魏略』逸文には、『翰苑』所引の同逸文の末尾に相当する文が、

本消奴部為^{（主）}王。稍微弱。今桂婁部代^{（主）}之。

と記されており、「消奴部」が「指奴部」となっていることも考慮に入れる必要があるからである。『太平御覧』の「指奴部」は『魏志』の「涓奴部」に通じるところがある。しかしながら『魏志』高句麗伝の「涓奴部」をめぐる（二）の記事、すなわち「涓奴部本国主。今雖^{（主）}不^{（主）}為^{（主）}王。適^{（主）}統大人^{（主）}得^{（主）}称^{（主）}古雛加^{（主）}」という記事は、『三國史記』高句麗本紀第三の太祖大王二十二年冬十月条に、

王遣^{（主）}桓那部沛者薛儒^{（主）}。伐^{（主）}朱那^{（主）}。虜^{（主）}其王子乙音^{（主）}為^{（主）}古鄒加^{（主）}。

とある記事に相当するものであると考えられる。この両記事を対比すれば、「涓奴部」と「朱那」とは同じものとす

ることができ、また、その音韻の対応から「朱那」は、「消奴部」ではなく、「消奴部」にあたることがかかるのである。

以上みてきたように『魏志』の「涓奴部」は、『魏略』逸文や『後漢書』本文、および李賢注に記されていることとく「消奴部」が正しい名称であり、背奈公行文の氏名「肖奈」は、青木和夫氏他校注本の校異補注の(六)で説かれているとおり、高句麗の五部の「消奴部」に由来する姓であるとみなすことができる。(六)で「肖奴」は、「セウヌ」であるとするが、「消奴」が「朱那」と表記されているのによれば、「消奴」は、「せうな」と読むべきであろう。

ところで高句麗の五部の「消奴部」の名称が「肖奈」「消奈」という姓になったと確実にいえることなのであるか。というのは、『後漢書』の李賢注によれば、桂婁部は、内部・黄部、絶奴部は、北部・後部、順奴部は、東部・左部、灌奴部は、南部・前部、消奴部は西部・右部と、後に称するようになっていたのであつて、『翰苑』注にも、

五部皆貴人之族也。一人^(目)内部。即後漢書^(時)挂樓部。一名^(中)黄部。一名黄部。二曰^(北)北部。即絶奴部。即絶奴部。即名後部。一名黒部。三曰^(東)東部。即順奴部。一名在^(左)部。一名上部。一名青部。四曰^(南)南部。即灌奴部。一

名前〔部〕。一名赤部。五曰^(西)西部。即消奴部也。一名右部。二名下部。一名白部。

とある。これによれば挂樓(桂婁)部は、内部・黄部のほか中部(原鈔本は、「一名黄部」の四字が重複しているが、上の「一名黄部」は、他の部の記述から類推して「一名中部」と考えられる)、絶奴部は、北部・後部のほか黒部、順奴部は、東部・左部のほか上部・青部とも称し、また灌奴部は、南部・前部のほか赤部、そして消奴部は、西部・右部のほか下部・白部(原鈔本は「一名下部。一名白部」が記されているが、他の部の記述から類推して補う)とも称されていたのである。

高句麗は、宝蔵王二十七年(天智七年、六六八)に滅亡するが、その二年前の天智五年(宝蔵王二十五年、六六六)、唐が高句麗の内訌に乗じて出兵した年に、高句麗は前部能婁らを日本へ派遣した(『日本書紀』天智五年正月戊寅条参照)。これ以後、高句麗の使者が、しばしば日本に派遣されてきており、前部能婁の「前部」のように、高句麗の五部を冠した人物が使者名として『日本書紀』に記されている。すなわち上記した前部能婁は、天智五年六月戊戌条にもみえ、天智十年正月丁未、および八月丁卯条には上部大相可婁、

天武元年五月戊午条に前部富加抔、同二年八月癸卯条に上部位頭大兄部子・前部大兄碩干、同五年十一月丁亥条に後部主簿阿于・前部大兄德富、同八年二月壬子朔条に上部大相桓父・下部大相師需婁、同九年五月丁亥条に南部大使卯間・西部大兄俊德、そして同十一年六月壬戌朔条には下部助有・卦婁毛切・大古昂加らの使者名が記載されている。

この間、新羅の文武王十年（天智九年、六七〇）、新羅は滅亡した高句麗遺民が擁していた高句麗王の外孫で大臣淵浄土の子である安舜（安勝）を王に立て、新羅の領域内に高句麗の国を再建させ、その新高句麗国が、日本に使者を送り、天武十一年（六八二）に至るまで、その関係がつづいたのである。こうした高句麗滅亡前後の高句麗では、五部の制の名称は、前部・南部（以上、旧称「灌奴部」、上部（順奴部）、後部（絶奴部）、下部・西部（消奴部）」という称呼が用いられていたことが知られる。そして、やがて高句麗の五部の名称が日本に渡来した氏族の姓に転化し、前部宝公（『続日本紀』天平十九年五月辛卯条・南部馬仙文（天平末年『貢進歴名帳』『大日本古文書』二五—九四）・上部真善（『続日本紀』天平十七年正月乙丑条・後部王同（同上、和銅五年正月戊子条・後部高笠麻呂（同上、天平宝字元年九月辛巳条）・

西部難男高（天平末年『貢進歴名帳』前掲）などの人名が記録にあらわれ、また『新撰姓氏録』には、後部葉使主・後部王（左京諸蕃下、高麗条）後部高（未定雑姓・高麗条）など高句麗の五部名に由来する氏名を称する氏族の本系が記載されている。

このように高句麗の五部の称呼が、日本で氏族名になっているのであるが、前部・南部など高句麗の五部の名としては新しいものが姓となっているのは理解できるように、西部の古称である消奴部の称呼が、「肖奈」「消奴」のような氏族名に転化することは、実際にありうるであろうか。こうした疑問は、当然生じてくるであろう。

高句麗の五部の古称は、西暦二一〇年ころから四二七年まで、つまり三世紀の前半から五世紀の前半まで存続していたものとみなされており、その後、高句麗の滅亡まで中部（内部・後部（北部）・上部（東部）・前部（南部）・下部（西部）の名称で呼称されていたと考えられている（末松保和『朝鮮三国・高麗の軍事組織』『靑丘史草』第一所収参照）。五部については、高句麗の領域を五区分した行政区（池内宏『高句麗の五族及び五部』『満鮮史研究』上世篇所収参照）、あるいは都城内の区分であり、かつ貴族の組分け（今西龍『高句

麗五族五部考」前掲書所収参照)、もしくは王都の五つの軍事集団と都外に五区分されて設けられた軍事管区(山尾幸久「朝鮮三国の軍区組織——コホリのミヤケ研究序説——」「古代朝鮮と日本」所収参照)とするなど、さまざまな説があるが、武田幸男氏が五部は「王都の支配者集団の五部組織である」「六世紀における朝鮮三国の国家体制」「朝鮮三国と倭」東アジア世界における日本古代史講座4所収」と指摘しているのが妥当であろう。

ともあれ高句麗の五部の古称に由来する名称は、史料的にやや疑問があるものの、『旧唐書』渤海靺鞨伝に、「祚榮遂率其衆。東保桂婁之故地」とみえ、また「開元七年(七一九)。祚榮死。……乃冊立其嫡子桂婁郡王大武芸」とあることからすると地域名として八世紀前半まで存続していたことがうかがわれる。

ところで平壤城壁石刻の一つに西暦五六六年にあたりとみられている「丙戌二月中」という年紀が刻まれている石刻に「後戸文達」とみえ(田中俊明「高句麗の金石文——研究の現状と課題——」「朝鮮史研究会論文集」一八所収、および同「訪朝私記」「朝鮮史研究会会報」八八所収参照、また五五五年に相当すると考えられる「乙亥年八月」の年紀があ

る泰川郡籠吾里山城石刻に「前部小大使者於九婁」という人名が刻まれている、六世紀半ばころに人名に「後部」や「前部」などの五部の名称を付した第一級の史料がある。

また平壤城壁石刻の一つに「己丑年三月」と書きだされている石刻に「内中百頭上位使余丈」とみえる「内中」は、五部の一つ「内部」の誤釈とされており、「己丑」の干支も「己酉」と釈読するのがよいという学説があるが、「己酉」ならば五八九年のものになる(田中俊明「高句麗長安城壁石刻の基礎的研究」「史林」六八・四参照。おそらく「内中」は、「内部」と判読するのが正しいと考えられ、「内部」の名称が、六世紀の後半に使用されていたことを明証する記録として、この石刻は貴重である。さらにこれらとならんで注目されるものに、平壤城壁石刻には年紀が記されていない石刻がある。それには、「卦婁盖切小兄加群」という人名が刻まれている。この石刻も前掲した「丙戌二月中」とある石刻とほぼ同じころのものと考えられている(田中俊明、前掲論文参照)。「卦婁盖切小兄加群」は、あるいは「卦婁盖切」と「小兄加群」の二人の人名とも思われるが、他の石刻の例からみて、「卦婁」から「加群」まで一人の人物名を表記しているとみるほうが妥当であろう(田中俊明、

前掲論文参照)。いずれにしても高句麗五部の古称である「桂婁部」に由来する名称が六世紀半ばころの人名に付けられているのに注目させられるのである。五部の名称として現実に存在していた「後部」「前部」などと同時に、五部の古称である「卦婁」が人名に冠せられてはいるが、前者と後者とを同じ性格のものであると、ただちにみなしてしまふわけにはいかない。後者は、当時の五部の制をあらわしたのではなく、地域名などとして残っていた古い五部の名称であつたと考えられる。

一方、日本の古代史料にも「桂婁部」につながる人名が記録されている。すなわち『日本書紀』天武十一年六月壬戌朔条に「高麗王遣下部助有。卦婁毛切。大古昂加。貢方物」とみえる「卦婁毛切」の「卦婁」、および『日本後紀』延暦十八年十二月甲戌条にみえる「卦婁真老」の「卦婁」は、高句麗五部の古称である「桂婁部」に由来する姓と考えてよいであろう（那珂通世「高句麗考」『外交歴史』所収、および今西龍「高句麗五族五部考」前掲書所収参照）。『日本書紀』にみえる「卦婁毛切」、『日本後紀』に記されている「卦婁真老」が、ともに、六世紀半ばころの石刻にある「卦婁蓋切」の「卦婁」と同じ表記であることも注意しなければなら

らない。

さて『日本後紀』の「卦婁真老」のことがみえる記事の全文は、

又信濃国人外従六位下卦婁真老。後部黒足。前部黒麻呂。前部佐根人。下部奈弓麻呂。前部秋足。小県郡人无位上部豊人。下部文代。高麗家継。高麗繼楯。前部貞麻呂。上部色布知等言。己等先高麗人也。小治田。^{（舒明）}飛鳥一朝庭時節。帰化来朝。自爾以還。累世平民。未^レ改^{（本カ）}本号一。伏望依^{（本カ）}去天平勝宝九歳四月四日勅一。改^{（本カ）}大姓一者。賜^{（本カ）}真老等姓須々岐。黒足等姓豊岡。黒麻呂姓村上。秋足等姓篠井。豊人等姓玉川。文代等姓清岡。家継等姓御井。貞麻呂姓朝治。色布知姓玉井。というものである。佐伯有義校訂標注の『日本後紀』同条の頭注には、「後部、及前部上部下部は何れも高麗の部落の名にて其本国にありし時の部落を以て仮に氏とせしなり卦婁も同じく内部の旧名なり」という説明が加えられている。ここに「消奴部」の後世の呼称「下部」とともに、後部・前部・上部という高句麗の五部の名称が氏名となっているのと同時に、内部・黄部・中部の旧名である桂婁部の称が「卦婁」として氏名となっているのは、下部・後部な

どとは性格を異にし、卦婁真老の祖先が高句麗の桂婁部に系統を引く「桂婁（卦婁）」と称する地域に居住していたことに由来する姓と考えたほうがよいであろう。

とすれば下部・西部・右部・白部と後世に呼称された消奴部という部名も、後にながく「消奴」という地域名として存続していたという類推が可能となる。おそらく福徳の祖父で高句麗から亡命して日本に渡来したという福徳は（『続日本紀』延暦八年十月乙酉条）、「消奴（肖奴・肖奈）」の地域に本拠を持っていた人物であって、日本に渡来した時、肖奈福徳と称し、その子孫が「肖奈（消奈）」を氏名とするようになったものと考えられる。

普通に考えられていた背奈氏は、実は肖奈氏であって、その氏称は、「せうな（しょうな）」であつたとすべきであろう。したがって「はいな」と読むことには従うことができず、従来「背奈」を「せな」と読まれてきたのは、あるいは「せうな」の音が「せな」と転訛し、「肖奈」とは別に「せな」の音の宛字として「背奈」の文字が使用されたという筋道も考えられなくはない。しかし、この氏名が存在していた同時代の記録には、ひとつとして「背奈」と表記されたものがなく、また古写本も「肖奈」と記しているも

のが多いことによれば、やはり「肖奈」が、後世に「背奈」と誤写されたとみるのが本筋であって、今後、背奈氏は、肖奈氏とするべきであろう。